

坪内健



ホ。ホ。ホ。精神科

Sample

はしがきにかえて―言葉にならない何か

ここに収録したのは、二〇〇八から二〇一八年まで「福岡行動医学雑誌」に執筆した文章を修正したものである。転載にご快諾いただいた福岡行動医学研究所所長神庭重信先生、執筆期間中の編集長である前所長松尾正先生にお礼申し上げたい。

元々は治療だけして文章は書かない医者でいるつもりだったが、一度書いてみると文章化する過程で自分でも思ってもいなかった発見があったりして、「年に一度くらいは、これくらい産みの苦しみを味わわないといけないな」と思い、毎年書くようになった。

春先に松尾先生から繰り出されるお題が、普段考えそうであまり考えていないところを取り上げていて、毎年虚を衝かれた。初夏までは、「何を書こうかなあ」と頭の中もやもやと考えながら過ぎ、夏の間悶絶しながら文章化していた。それが普段やらない運動をして変なところに筋肉痛を起こしたり、インナーマッスを鍛えたりするような効果があったのではないだろうか。田舎で訓練を受けるような機会もないので、自主練のつもりで続けていた。

原稿を提出して半年くらいして松尾先生から送っていただいた別刷は、自分でもそれなりに嬉しくて、知り合いに読んでもらったりした。十年分たまったからひとまとめにしたいと思い、せっかくだから本という形にした。

最初は「自費出版して知り合いにだけ配ればいいや」とも思ったが、もしかしたら偶然誰かが読んでくれて、別の出会いが生じたりするかもしれないので、一般販売の道も少しだけ残した。こういう小さな自己愛がどんな展開をもたらすかは、僕にとっては未体験の領域である。これも一つの勉強と思っている。

以上の経緯で作った本なので、それぞれ独立したテーマで書いた文章の寄せ集めである。

通して読む必要はなく、気になったところをいか所でも読んでいただければ嬉しい。

中に患者の話も出てくるが、全て僕の臨床経験の断片を寄せ集めて作った架空症例である。

文章化はストーリーや解釈を固定してしまいがちだ。ある期間を切り取って成功したかのような話が、後日談を聞くとそうとも言えない展開になっていることがある。逆に、失敗したと思っていた治療が、どこかでうまくまとまっていることもあるだろう。失敗したと思っているのは、治療に来なくなった患者や病院を変わった患者、主治医を交代した患者などだ。そういう人もその後元気に生活してくれているといいが、会わなくなっているのだから確認しようがない。

こないだTVのドキュメンタリーで、仏像の修復をする仏師が、「直したあと、「一体どこを直したんや」という修復をしたい」と言っていた。「修復すればそれで満足で、自分の名を残そうという気にはならない」とも。

これは治療者としての僕の心境と重なるものがある。だから、治療者としては無名性を

保つ方がいいような気もする。

時々、「昔お世話になったんですよ」と、たとえば市内の店員とかに言われることがある。しゃべりかけられるのだから、そこそこ元気で、かつそれほど恨まれてもいないのだろう。僕の方もうっすら覚えていたような気もするが、名前までは思い出せない。

治療というのは、それくらいの濃度がほどよいのではないか。だから治療のことを文章化して残すというのは、少し治療者の方で治療の記憶を濃くしてしまう。これも本にするのを躊躇する理由の一つだ。

タイトルは吉増剛造の著作からヒントを得て『精神科の柚道』とか、保坂和志から取って『精神科の地鳴き』も考えたが、最終的には田中小実昌の『ポロポロ』から取った。ポロポロというのは、言葉にならないことを、さげんだり、つぶやいたりしている、異言のこと、まさに本書のテーマかなと思う。

僕は決して言葉を軽視しているわけではない。言葉で表現できる世界と言葉で表現でき

ない世界があり、もちろん僕らはそれらがモザイク状に混ざり合った世界を生きている。後者であっても言葉がないとその存在を表現できないのだから、どちらにせよ言葉は必要だ。だから僕はむしろ言葉を重視して、こね回していると言ってもいいくらいだ。ただ、こね回す対象が、元々言葉で表現しにくいあいまいな世界なので、あるアナロジーから別のアナロジーに入れ替えて、結局中身が何だったのかは分からずじまいということが多い。

本書に特に画期的な治療法が書いてあるわけでもなく、僕が声高に自己主張をしたいわけでもない。でも、そうは言っても、この精神科臨床の世界を自分なりに書き残しておくたい気がする。まごまご、もごもご、ポロポロ……と。うまく言葉にならなくてもどかしいが、このもどかしい感じは、患者が診察室にやって来て、何かを言いたいけど、言い切れない感じに似ているのではないだろうか。だから、僕が悶絶しながら文章化したものの一部は、患者の代弁をしているということになるので、そういう意味では、この本書も少し

意味があるかもしれない。

僕は精神科臨床の世界で、あれこれと患者の人生をねじ曲げようとしているのではなく、同伴してその流れに連れ添っているだけだ。そして、同伴して見つめた世界にはたしかに、人の生きることの強さとかせつなさとか奥深さとかが表れていて、僕としてはそこにあれこれと味つけせず、できるだけ素材をそのまま言葉にできればいいなと思う。

目次

はしがきにかえて―言葉にならない何か……………2

微音、微温……………11

こころのデジタル部分とアナログ部分……………27

薬について語るときに我々の語ること……………39

診断、していないのかもしれない……………53

僕の精神科医前史……………63

若い頃の思い出の断片……………81

ゴジラ、ロック、精神科医……………95

緩和ケアの風景……………107

物語は僕の知らないところでそっと立ち上がる……………121

高齢者と家族、死と再生、もしくはは出口と入口……………141

治療の残り香、治癒のその先……………165

ある夫婦の記録……………179

書評

1 トマス・ピンチョン『メイスン&ディクソン』……………204

2 トマス・ピンチョン『重力の虹』……………206

3 ティム・オプライエン『本当の戦争の話をしよう』……………208

4 リチャード・パワーズ『舞踏会へ向かう三人の農夫』……………210

5 小林章『フォントのふしぎ』……………212

6 森山大道『昼の学校 夜の学校』……………215

7 サイモン・シャーマ『風景と記憶』……………217

8 村上春樹『夢をみるために毎朝僕は目覚めるのです』……………219

9 レイモンド・カーヴァー『ピギナーズ』……………221

10 保坂和志『カンバセーション・ピース』……………224

11 広井良典『コミュニティを問いなおす』……………226

12 デヴィッド・フォスター・ウォレス『ヴィトゲンシュタインの箒』……………229

13 W・G・ゼーバルト『アウステルリッツ』……………230

あとがき……………235

坪内 健（つぼうち・けん）

一九七二年、岡山県生まれ。一九九七年、島根医科大学（現・島根大学医学部）卒。医学博士。島根大学医学部臨床教授。二〇一三年より、社会医療法人正光会松ヶ丘病院院長。

精神科ポロポロ

発行 二〇二二年八月六日
著者 坪内 健
発行所 さいはて社

Website: <https://saihatesha.com>
E-mail: info@saihatesha.com
Tel: 050-5361-7453
Fax: 050-5388-7453

編集 大隅直人
装幀 北尾 崇
装画 坪内 健

Copyright ©2022 by Ken Tsubouchi
ISBN 978-4-9909566-8-4



9784990956684

ISBN978-4-9909566-8-4

C0095 ¥2000E

定価 本体2,000円 + 税



1920095020006